

見て居ると今迄頻りに小便で顔を洗つて居つた妻君が眞鍮の入れものに粟の飯を山盛に盛つて而かも其の上を御叮嚀に小便の手で押さへ附けて呉れるのである、之れが朝鮮の風俗であるから仕方がない、夫故に大抵の時は一所に持つて来る匙と箸があるから、其眞鍮の容れものに接した方と上の手で押へ着けた方を食はぬ様に眞ん中丈を掘つて喰ふ之れが三石式トンネル食ひと云ふ奴だ、ケレドモ其時計りは腹が減り過ぎた爲めに頭からムシャ／＼と平げて仕舞つた勿論犬にも随分喰べさせた。

茲に出て永興川の上流熊周山の八合目位の所まで行く大きな岩角に衝突した上に登ることが出来ぬからぐるつと廻つたが一方は谷上は岩がかぶさつて居つて山上に登ることは出来ず、岩角は殆んど鋸の齒の如く突ツ立つて居つて仕方がないから腰から細引を出して夫を岩角に投げ掛けてそれにブラ下つて下りやうとしたが距離が離れすぎて居て下におりる譯に行かぬ元より上に登ることは出来ず眞に進退茲に谷まる譯である。

頻りに困つてゐると鼻先七八間前に一個の黒い塊りが見える能く見るとムク／＼と一疋の猛虎が現はれたので我を忘れて向ふへ飛んだ、虎と私との間は僅に三間計しか隔つて居らぬ、而かも虎は満身の毛を物凄く逆立て居る、モウ斯うなつては仕方がない、シカシ如何に敏捷なる虎とは云へ電光石火の如くは行くまい此虎如何なる行動をなすかこたひは最後まで見届けくれんと狙を定めた虎と私とは今や組み付かんと睨み合ふて居るのである若しも一つ打損じて左の肩へでも飛びつかればバツとやられたらそれ限

りだ實に風前の燈火であるかくてあること暫時敵はサツと風を切つて飛び付いたこの瞬時私は思はず引金を引いてズドンと一發放したがバツと毛の散つたのが見えただけで別段襲つても来ないのに稍安心して先づ自分の分銅を調べて見たのに北海道で初めて熊退治をやつた時とは違つて分銅に毫も異状がなくシツカリして居つたのには我乍ら感心した。何故なれば鐵砲の先から弾が飛んで出でバツと毛の散るのが見えた位であるから。しかし如何なることかと頭の中の急がしさは急行列車の往復の如き有様だ夫から心を定めて進んで見ると此大虎は我砲の爲めに頭を打ち抜かれ見ん事斃れたのだ斯くと見た時の嬉しさは實に例ふるに物なき次第であつた夫からその虎を調べて見ると頭から尻まで九尺七寸あつた此大虎が一發の爲めに打つ倒れたので此時許りは嬉し涙がポロ／＼流れた之が本統の嬉し涙だサウ斯うして居ると山の麓の方から人聲がして段々近寄つて来るやうであるツイに自分の居る所へ来た見ると之れは日本人と朝鮮人十五人許りで今打つた鐵砲の音で安否如何と氣遣つて來たと云ふことである夫から人々に頼んで皮を剥せ其皮を提げて永興の町まで歸つて來たサウすると永興の鮮人は三石さん此虎の皮を三遍跨がせて貰ひたい病氣にならぬ呪咀になるからと云ふから夫は許さぬ拙者に對し日本人に虎は獲れぬ杯と失禮なことを申したからと叱り付けた。

小便を十五年も十六年も甕に貯藏して置いて其上水を捨て底に沈澱したものを肺の藥だと云ふて簪の耳搔ですくつて飲んだり赤ん坊の糞を能う天日で乾燥して夫を藥研に入れて細末にして飲むと神經衰弱に

ならぬ杯と云ふて居る話が横道に入つたが此得た所の虎の皮を製して東京に送つて置いて更に今度は豆満江の流れに流れて白頭山に登ることにした。

朝鮮人と云ふ奴は妙だ仕事は仲々せぬ仕事をすれば金が儲かるではないか何故せぬのかと聞いて見ると彼奴は貧乏だから仕事をする云ふて輕蔑されるからと云ふて喰ふ物がなくなるとその中に這入つて松の木の子皮と云ふ松脂臭い物を取つて喰つたりして居る。夫でも仕事さへせぬと彼奴は豪い金持だと褒められるのである、之を聞いて我輩之れが我々の新しい兄弟かと思ふて長太息を致したのである。

此時は脊中に十五貫目餘りの荷物をドッコイシヨと脊負込み手には一貫二百匁からの銃を持ち腰には彈を二百發其重さが七貫目餘り尙腰には刀まで佩して居る斯う云ふ扮装で雄基嶺に至つたサウすると大きな岩があつて其上に見たこともない異様の獸が居つて岩の上から僕の頭へ小便をジャア／＼ひり掛けた腹が立つたの何のと云ふて荷物をソコに下して己れと思ふて狙を定めて一發ドツと放つた銃は新式打ち手は善し立所に命中して岩の上からドツと落ちて來た夫れを持つて行かうと思つたが二十貫目からの荷物を持つて居る上にとても更に十貫目もあらうと云ふ其の獸を持つて行くとは出來ぬ彼是して居る間に支那人が一人通り掛つたから之を持つて居つて呉れぬかと云ふと持つて行くとも行かんとも言はずに壹圓壹圓と言ふのである、ソレナラ壹圓やるから持つてと夫を脊負はせた、元來支那人と云ふ奴却々横着で金さへ取ればイヤになると何處にでも抛つたらかして行くと云ふとを聞いて居るから金は後で渡すことにし

て兎に角懷中を調べて見ると金が僅かに七拾錢よりない、壹圓と約束をして七拾錢よりないので之れは困つた、併しイザ金を渡すと云ふ時にグズ／＼言ふたら參拾錢は拳固で拂らはう、支那人與みし易しだと決心して會寧に着いたサウするとソコの友人が君大きな狼を獲つたなど云ふから僕は何か知らぬが此奴怪しからぬ奴で岩の上から人の頭に小便をひり掛けたから打つたと云ふと夫れを僕に賣らぬかと云ふことである、賣つてもよいと云ふと今僕茲に七圓よりないから夫で賣つて呉れと云ふから何程でもよいと云ふので遂に之れを七圓に賣つたから支那人に壹圓を渡して茲に一晚厄介になつて夫から茲を出立した。

夫から四晩程泊りを重ねて白頭山の方面に進む間に懷の金は唯四拾貳錢よりないから泊る譯には行かぬから宿屋に寄つて夕飯だけ注文して給仕女に用を言ひつけて其の場を去らせて明日の分の喰ひ溜めをする積りで一寸十七八杯喰ふた、モウ之れ丈け喰へば大丈夫だから茲を出で會寧から二十一里歩いた、サウすると非常に睡くなつた。道端の木の下で荷物を下して高野で寝て仕舞ふて前後不覺の有様だ、サウするとオイ起きぬか／＼と揺り起す奴がある、其の聲で目が覺めた、ケレども眼は開かぬ、誰れだ人の寝て居るのを起す奴はと云ふと誰でも宜いと云ふので眼を開いて見ると黒衣を纏ふた大入道だ、コリヤ坊主何の用があつて起したんだ、不都合な坊主だ、人を起した以上は一かたけの飯を呉れぬかと承知せぬと云ふと入道カラ／＼と笑つて、ア、此奴腹を減して居るんだなヨシ／＼食はせてやるから來いと云

ふから、此糞坊主嘘を吐かふものなら承知せぬと言ふと、そんなことを心配するな、併し貴様はドコから来て何處へ行くんだと尋ねるから俺は北より来て南へ行くんだ、コノ男面白さあ来いと云ふが腹が大分減つて居る所へ大きな荷物だから思ふやうには歩けぬ、貴様大分腹が減つて居るんだと云ふから御察の通り今朝から一粒の飯も喰はぬと云ふと暫し行くと朝鮮人の宿屋に這入つて飯を出させて給仕女の留守に坊主大きな握り飯を拵らへ白い大きな袋中へ入れて仕舞つた、此坊主却々キョウな早業をやるワイと思つて居た、夫から坊主のゐる寺へ行つて泊つて其の晩は例の腰刀を枕元に置いて寝た、すると坊主其の刀をソツと持つて何所か表へ出て行つたから僕は此奴は泥棒坊主だヨシ、今に歸へつて來たら六連發を浴せかけてやらうとグウ、寝た振をして銃を側に引き寄せてゐた、約四十分程経つと歸へつて來てソコ等を見廻して此野郎鐵砲をイジつたなど言ふのでギョツとしたが、先づヤイ坊主喧嘩をしやうかと云ふと貴様は喧嘩が好きか幾ら好きでも腹が減つて居つては出來ぬから今飯を喰はしてやると云ふ事だ、其内飯を炊いて喰せた、夫で名前の名乗合もせず坊主と私が云ふと向ふでは野郎と互ひにコシなどを言つてツイ四晩泊つた、五日目になると坊主がモウ俺れには金も着物も何にも無くなつたから何處か行かうと言ふことである。夫れから「シヨウジョウ」と云ふ所までやつて來て一と晩泊つた、サウすると坊主錢がないと云ふ癖に酒をガブ、と呑んで居る其中に飯を出したから僕は太い喰ふた、サウすると坊主例の通り給仕女に用を言ひつけて立たせて置いて其の後で大ムスビを拵へてハンカチー

フに包んで呉れて野郎何處へでも行け後どの始末はオレがして立つと云ふ事である、喰ひ逃げは甚だ心持ちが悪い、坊主拂を何うするかと云ふと何うにかなる心配するなど平氣なものだ。

勘定は何うかなるだらうで平氣で酒を呑んで居るやうな危険な坊主と一所にゐては仕舞にはドンナ目に會ふかも知れぬ、シカシ大望を控へて喰ひ逃げの組合にされては甚だ困ると心得たから「シヨウジョウ」の憲兵分遣所に立寄つて一伍一什を話し坊主喰ひ逃げをするかもしれないが縦んば喰逃をした所で一週間許り僕が厄介になつた坊主だから縄だけは許して呉れいと頼んで一旦會寧に歸ることにして三日程掛かつて引き返して來た。

其後「シヨウゼウ」の憲兵が會寧に來たから坊主が喰逃をしなかつたかと聞いて見ると何にも云ふて來なかつたと云ふことである夫が會寧まで來る途次「シヨウ」城から尊い坊さんが來ると云ふことを至る所云ひ囃して居る。

其時ふつと考へた事に依るとアノ糞坊主かもしれないと思ふた夫で町外づれには百人餘りの人が道の兩側に並んで出迎をして居るドンナ坊主が一番見てやらうと思つて道の真ん中に突つ立つて居つたサウすると案の通り糞坊主である大手を振つて大威張りにやつて來て世話役見たやうな奴が僕の側へ來て君は誰だ罰が當るぞと言ふて除けやうとする段々聞いて見ると本派本願寺派遣の説教師文學士鈴木玄海と云ふ人間であるとの事である愈ゝ側へ近寄つて來たからア、糞坊主かと云ふと此野郎何うしたと言ふ挨拶だ

それで出迎のものも驚いたらしい。夫から宿は同じであつて先づ「ショウ」城の勘定は何うしたと聞く。とアリヤ幸い宿屋の小供が死んで間も無いのと悲しがつて居る物語りを耳にしたので佛壇に參つてやつてお經を上げてやると五圓金を呉れたが七圓幾等の拂ひだからマダ少し足らぬソコには外に日本人が十ニ戸あると云ふことだから一軒毎にお經を上げて廻つたら全部で九圓何がしかお布施が上つたソレで七圓幾らの勘定をして終つて茲まで來たがマダ貳圓幾らか残つて居ると言ふから如何にも坊主マル儲けとは能く言ふたものだと言ふと坊主も其通りジャと言ふて居る而して其次の日坊主が余所に出たから武士は相互ちや勘定は宜しく頼むと書き残し宿屋にはアノ方から勘定を戴いて呉れと云ひ遣して出立した。夫から此日白頭山の方向に向つて出發した上水湖新豊山に何するので茂山十三下面等を（地理上誤聞なきを保せず）此新豊山と會寧との間は僅かに七里半しかないから晝飯を喰てから會寧を立つたのだが夫から四里と云ふものは登り許りである。憲兵の話に此日中に新豊山に行かうと云ふには對岸の支那領の間島から船で渡して貰へば行ける左もなければ行けぬと言ふ話で間島から行くに僅か一時間で行ける向ひ側の支那領へ渡らんと云ふことに付ては手には刀を提げ肩には鐵砲を擔いで居るのであるから果して無事に通過することが出来るか之れが頗る問題である。

間島には支那の守備兵が二人若くは三人一日一回か二回位しか巡らぬと云ふことである若し大勢が出て來て刀や鐵砲を取り上げられては困るが二人や三人なら得意の武術を以て打ち懲らしても宜いだらうと

語るとウン宜いと云ふ事だ夫からして私は無謀と言はふか大膽と云はうか向ふの山を二ツ越すまでは何事も無かつたが間島の町の入口まで行くに支那の守備兵が三人やつて來た知らぬ顔をして歩んで居ると段々近寄つて來た其場所が何處かと言ふと町の真ん中ではばつたり會ふた、夫で當方から手向ひをすれば支那人が黙つては居らぬから濫りに手向ひは出來ぬと考へた。コッチは荷脊負と僕と二人で支那兵は三人であるソコで支那兵は市街の往來の真ん中に立つて居るので平氣に行き過ぎやうとすると兎に角黙つて道を開いて通した。

行き過ぎて暫くすると又五六人居る夫で後から附いて來た支那兵と何か譯の分らぬことをグウ／＼言て居ると思ふと石を擲んではボン／＼投げ附けるその投石が頗る巧で殆んど一ツも無駄石がない其間棍棒を持って追つ掛けて來る姿が見えるソコで兎に角町の真ん中で勝手が悪いから一生懸命逃げ出した、段々逃げて山の中頃迄行つて來たサウすると段々多數の支那人も加つて追ひ掛けて來て我々を包圍してバタバタと近寄つて來た何でも之れは僕等を生擒にする考へと見受けた、何うせ殺されるなら屑く殺されやうだが大和魂を有する吾輩何ぞムザ／＼殺されて濟むべき、多年鍛へに鍛へた弘道館加納流の柔道三段免許の腕前を出すは此時なりと當るを幸ひ取つて投ると或は水中に水煙を立てゝ溺るゝもあれば崖をコロ／＼轉り落るもある瞬く間に十八人投げ付けると何れも之に驚いたものと見えて皆なドン／＼逃げ出して一人も後を追ふものが無くなつて實に大風が止んだのか大水の引いたやうな心地がして活路を開

くことが出来てヤレ嬉しやと思ふた夫から岸邊に出て来て船を探した所が間島の方には一艘もない早く船を持つて来いと幾ら呼んでも更らに持つて来ない、愈々仕方がないから水に飛び込んで水の流れに身を任せ向井流の水練で泳ぎ付き船を取つて来て供と荷物とを載せて目的地に着いたサウすると僕が虎狩に来て已に大虎を獲つたと云ふことが知れ渡つて朝鮮駐劄の旅團高級副官三浦誠氏及び中村工兵大佐がソコへ尋ねて来て君に一つ頼みたい事がある夫は命を賭して引受けて貰はねばならぬ事件だが承知して呉れるか如何かと言ふことである事柄が分らぬから夫は何事だと反問すると軍事上の秘密だから引受けると云ふ誓約が出来ねば言へぬと言ふ事であるソコで僕は宜しい夫迄信用して僕に頼むなら事柄の如何は敢て顧みない確かに承諾したる事と誓ふと答へたソレならとて三件を依頼せられました。事の内容は軍事上の秘密に亘るから詳細の事は勿論私の命のあらん限り明にする事は出来ぬ。單だ一事のみは披露しても差支へはないがそれは咸鏡南道の農事洞と寶秦洞とを即ち支那と朝鮮との境界を明に極めることである。先づ私は三下面の憲兵分遣所に立ち寄つた所がこゝに居合せた知人が「君何處へ行く」と尋ねるから「白頭山に向つて行く」と答へたすると「君白頭山へ行く？ トンでもない、馬賊が出る、行くな行くな」と勸めて呉れたが「元來僕はツムジが曲つて居るのでは是非とも行くなと言はれると餘計行きたくなる」と言へば「馬賊が出るか虎が出るか逆も満足に歸ることは出来ぬ日本人も支那人も度々企てたが行くもの悉く歸つて来ない君是非ともよすが宜い」と引き止めるのを耳をも假さず出掛けました。

此白頭山は虛頂嶺若くは魚頭嶺等の別名がある様に言ふ者があるが之れは違ふ此れは白頭山の麓にあるので咸鏡南道から見れば一つの山の様に見える三十幾方里何處に頂があるか頭のない山の様に見える此中には天地開闢以來人跡の無い所が幾らもある勿論道も何も無いので茨雜草熊篠寺を踏み分け或は斷崖絶壁を攀ち登り段々進んで行くと日も暮れ果てゝ行く先も分らなくなつたので其邊に横つて寝ようとしたサウすると犬の奴が吠え乍ら僕に身を寄せて来る不思議だと思ふて居ると枯木でも折る様にボキボキガサ／＼何物か押し寄せて来るらしいその數分らないが少なくとも七八百乃至は千頭も居つたらう。それが盛んに吠え出した。其鳴き聲で山犬なることが分つた段々近寄つて来たからドン／＼放つたが所謂闇に鐵砲で一向譯が分らぬ。やがて山犬は私の頭上を飛び交すそれが一疋も残らず皆小便をヒリ掛けて行くその臭いこと夥しい無中で二十二發放つた此の中に滿州産の山犬が交つて居て之は普通の奴とは違つて性質仲々獐猛で隙を見て食ひかゝらんとして居るモウ發砲する暇がなく喧々囂々どモウ足下近く襲來した、刀を抜いて縦横無盡に薙ぎ立つたが最早や危機一髪と迫つて來たのだ、此一刹那不圖思ひ付いたのは火を恐るゝと云ふことだ夫から懷中から探海電燈を取り出してバツと點じた敵は驚いたのだらうサツと引き退いた我策當れりと思ふて今度は燐寸を取り出して枯草に火を點じた見る／＼四方八方一面に燃え擴つたので死骸を残して何處ともなく逃げ失せてしまつた。夜が明けて見ると山犬の死体二十八中に五六頭は友達の爲めに食はれた奴もあつた暫くするとガヤ／＼人音のするのを聞き付け馬賊なるを

覺つて近づくを待つて名乗を揚げたが一向返事がない戦々競々として居ると豈に料らんや朝鮮の皮商人である昨夜の砲聲を嚙ぎつけて來たのだらう山犬を賣つて呉れと云ふ早速金貳拾七圓を受取つて死骸を拂ひ下げ自分は尙頂上指して登り初めた午後三時頃であつた。一天俄かに掻き曇り霹靂夥しく我前後左右を鳴り廻した確か山神の怒つた爲めであらう斯くて翌日辛じて山頂に達した山頂には周圍十五六町もあらうとする湖があつて清水を湛へて居るその水一方に溢れて五つの巨岩の間から流れて居る是れ實に豆滿江の源泉をなして居るのである今や吾人は海拔八千七百尺の白頭山よりも高きこと五尺一寸古人の痕跡を留むるもの僅か三人を以て數ふる此の無人の境に踏み入り而もその絶頂を極め諸峯我に歸するを睥睨した時の快感再び禁する能はず身近の巨木を削つて而して曰く「明治四十四年七月十五日三石白水白頭山絶頂を極む」と又彼方の岩上に跨つては累々と紀念の脱糞して祈つて曰く「汝若し心あらば化石となりて千載に残れ然らずんば生きて汝が臭氣を無窮に放て」と。

遂に辭して下山の途に就いた途中自然の温湯涌出せるを發見して欣喜雀躍左右なく入浴して全身を清め又衣服の大洗濯をやつた下から湯上から雨私は此の境に在て誠に言語に絶する好き心地で沐浴して居たのである數日の疲憊爲めに去らんとした時つい睡氣を催してまごろんだ所が夢か現かベキボキの音を聞きつけてヒョイと突立つた見ると二疋の巨熊が既に我身近くに寄せて來て居る占めたつと銃とり直し熊アと呼ははるとガアと立ち上つたとたんズドンと一發喰はせた見事一疋は倒れたが他の一疋は我銃口を

グイツと握つて放さないさア大變！此時私は眞の裸かで禪も何もして居らぬフリ分銅であるそこで此の大熊をすかしながら豫て用意の刀の場所まで引つばつて來て片手に熊を支へ片手に刀を以て突き挿んとしたこの時熊は私の分銅を見て「人間と云ふ奴は妙な所にまだ玉を持つて居る此れでは逆も叶はぬ」とでも思つたのであらう流石は熊君少しも騒がず自分の突き挿す一刀を眞正面に受けて倒れて終つた。マア之で安心と熊の片手掻き切つて食つた時の甘かつたこと！

夫から元の處へ歸つて來ると愛犬は豹とこゝを前途と戰つて居るのだ忽にして私は彈丸を詰め能く狙つて放つた心算だが中らなかつたのだらう同族間の強敵三石白水氏來襲と見て取つたる豹は一も二もなく飛び掛つてガバツと我横腹に喰ひ付いたそれとも思はず刀振りかざして切つて入るもの數度暫時の惡戰苦闘の後遂に彼を斃して凱歌を奏した次第である後でカンヨリを拵へて創の輕重を見てやらうと思ふて創口に入るだけ挿し込んで見たら約一寸程も入つた是位の輕傷何かあらんと思ふて膏藥を貼つて置いた數日にして癒つて了つた。

近く私はインド及びシヤムに向けて一生一代の狩を企て世界的大冒險を敢行せんとします或は此の舉を以て無謀なりとせらるゝ方もありませうが私はかくは思ひませぬ。

諸君！ローマ帝國の廢亡支那の衰微之が原因をなせるものは何でせう墮落腐敗なるのみ。

翻つて我國現代青年を見れば如何でせうこの恐るべき墮落腐敗なる語は青年の定冠詞否その代名詞とも

成つて居るではないか青年と云へば墮落、墮落と云へば青年と聯想せらるゝと云ふ有様。如何でせう。かの綺繡を被り朱纓寶飾の帽を戴き白玉の環を腰にし右に容臭を備へ左に美人を携へて居る奴等は!!現に我輩の異境に於て萬難と戰ふてゐた砌名古屋の或る青年共は常に女の尻をのみ逐ひ廻して居たと云ふことである。

諸君!!!諸君は他日國家の中堅として一國の盛衰は君等が双肩にあるではないか。

かくては來るべき世の運命や亦知るべきのみ。

之れ實に余をしてこの舉に出でしめたる一大原因であります。

鹿の死する音を擇ばず人の死時も亦然り、余今諸君と分るゝに當り二十九歳を一期としての生別死別となるやも知ることは出來ぬ。

冀くば彥根金龜の健男子。肉体の運動、精神の修養、ゆめ／＼怠り給ふな。大正の維新は精神上の改革であるぞ。

別るゝに臨み諸君の健康を祈る。(終り)

文責在記者(寺村)

論 說

友道を論じて軍國民の覺醒を促す

第五學年甲組

辻

孝

藏

(一)

大丈夫身を立て道を行はんには宜しく一士の謬々たる友なかるべからず。眞に相輔けざる友は百千ありとも無きが如し。

管仲曰く我れ始め困せしとき嘗て鮑叔と賈す。財利を分ちて多く自ち與ふ。鮑叔以て食るとなさず。我れの貧なるを知ればなり。吾れ嘗て鮑叔の爲めに事を謀て更に窮困す。鮑叔我れを以て愚となさず。時に利不利あるを知ればなり。吾れ嘗て三たび仕へ三たび君に逐はる。鮑叔我れを以て不肖となさず。吾れの時に遇はざるを知ればなり。吾れ嘗て三たび戦ひ三たび奔る。鮑叔我れを以て怯と爲さず。我れの老母あるを知ればなり。公子糾敗る。召忽之に死す。吾れ幽囚せられて辱めを受く。鮑叔我れを以て耻なしとなさず。吾れの小節に耻ぢずして功名の天下に顯れざるを耻るを知ればなり。我れを生むものは父母、我れを知るものは夫れ鮑叔乎と。

世事紛々たる現時社會に於て予の寡聞孤陋なる未だ醇乎と醇なる古の管鮑あるを聞かず。然れども客臘寸暇を得て耕堂中野君（東朝記者、予の私淑する人）が椽大の筆を振ひてものせる評論を讀み、當時時流日に非なるを慨せし予は文中國士の友義に感じ快乎一番案を打て起ちしもの一再ならざりき。嗚呼世は澆季に傾くとも人情尚ほ地に委せず。當世人中に此の人を見る。天の配劑も亦妙なる哉。希くは予をして當年の犬養木堂氏と尾崎愕堂君の厚誼を語らしめよ。

(二)

兩君嘗て年少共に慶應義塾に學ぶ。當時尾崎君は風姿靡然高論風發才華備はり辯舌流るゝが如く優に塾中の花と謂はれにき。若し夫れ犬養氏は東洋的豪傑を以て自任するもの敵袴短褐蓬頭亂髮高履を踏み鳴らして高路に放吟するもの、固より尾崎君とは言行相容る可くもあらず、而も兩人霸氣を藏する點に於ては齊しく一致せり。會々傍人の紹介に由りて旗亭に相會ふに及び、一夕の快談速くも慧眼なる木堂氏は尾崎君の尋常一様の凡クラ貴公子にあらざることを看破せり。是に於て同氣の相求むる所固く刎頸の交を誓ふに至れり。

愕堂學舎を出でて遠く新潟に筆政を宰せしが君が鬱勃たる奇氣は筆端に燦えて論陣堂々厚顔なる地方陣笠因循守株なる縣官小吏を完膚ならしめしと傳へらる。

明治十四年君は再び都門に還り矢野龍溪氏の誘掖に因りて木堂と共に官途に就けり。二堂刀筆の才なら

ず、府中の事紛々として徒らに煩はし。兩人互に恨みず。英雄も風雲を得ざれば如奈ともするなきを知ればなり。適々大隈伯の官海を去るや兩人亦共に共に冠を掛け去れり。毫も不遇を嘆する無し。素と之れ兩人自負すること大に官祿固より其の志にあらざるを知ればなり。後愕堂は木堂を誘ひて郵便報知新聞に入り再び文筆の人となりしが木堂快々として獨り朝野新聞に移れり。毫も愕堂を恨むことなし。是れ兩人の力以て報知社の頹爛を支ふるに足らざるを知ればなり。管仲の曰く吾れを知るものは鮑叔なりと。兩人亦互に知れり。故に毫も疑ふことなき也。

改進黨の組織せらるゝや木堂恒に愕堂を推して表面の舞臺役たらしめ、自ら裏面の籌策に任ず。是に於てか尾崎愕堂の名漸く朝野を震撼せり。木堂毫も羨望することなし。是れ已れ達せんと欲して先づ其の友の達するを喜べばなり。狹陋の室紅塵堆裡隙間洩る明月を眺めて苦吟し破窓の下に燒芋を嚼り泉流を飲み質品亦盡き余す所は一枚の單衣と煤ばけたる漢書のみ。兩人聊かも憂へず。是れ吾等經世の才にして素より辭令扞屈に短なるを知ればなり。

蛟龍は永く池中のものたらず。憲政黨内閣成るや鮑叔の木堂は管仲の愕堂を推して文部大臣たらしめ自ら留りて黨務を斷せり。素より木堂氏は年少漢籍の修得に於て得る所ある人、その臍下三寸の修養は君をしてこの謙抑に出でしめしと雖も當時政界の大星小星垂涎の的たりし大臣の椅子が當然頭上に落ち來れるを惜氣も無く他に譲りて顧みざるが如き其の心事の皎々たる豈に史乘に傳ふべき千古の美事にあら

すや。

嗚呼兩人の交は斯くの如し。其の意氣其の情誼は凜烈として秋霜の寒きより寒く以て一代の人心を奮起せしむるに足る。然らば即ち二人を目して明治の管鮑と云ふも溢美にはあらざるなり。

翻て明治の政界を観れば大小の政客は錯然として晝夜の星も管ならす。然も兩堂群倫を抜き嶄然頭角を現し、後年尤に政界の驥麟兒を以て目されしもの又二人が紅顏綠眉のとき相共に貧窮と戦ひ艱苦を凌ぎ諫め補ひ矯め教へ懇切善導不識の間に神身を陶冶し自己の天地を開拓せしに因るにあらざるか。

知らず。苦節三十年鬢華幾條の多きを加へし我が木翁。當年を回憶して如奈の感がある。

嗚呼鮑叔の寛宏容る無くんば管仲何ぞ志を天下に濟すことを得んや。又木堂の衷誠愕堂を輔くることなくんば愕堂何ぞ馳名を馳することを得んや。

(三)

斯かる事例は管鮑兩堂の専有物にあらず。

人生一たび知己に感ず死すら且つ辭せざるの士も尠なからず。知らずや。晉の豫讓は智伯の爲めに衣を切り、韓文公は十二郎の文に千載の下幾人の士を哭かしめしを。彼等の前に於て黃白畢竟何するものぞ。吾輩は誦詐苟合陷擠善柔便佞諂諛等あらゆる惡徳の滔々として行はるゝ現代に於て心ある人士に先づ此の一文の三誦を勸むるものなり。

君子の交りは利きこと金を斷つ。小人の交は紙の如し。彼等の志望は畢竟阿堵物の外を出でず。利の重くして友の輕きも亦宜なる哉。

憐れむべし、彼等は自ら天賦の霸氣を埋没し去り稜々たる圭角を消磨し盡し群小に附加し俗論に媚びて所謂圓轉滑脱と稱す。富貴顯榮に努めて交を求め其の順境にあるや錦繡の交の如くに扮し密かに繋累を求めて利達を圖り家に歸て妻子に誇る。

其の交りは苟且のみ。故に一朝友の落魄に會せんか袖手旁觀悠々行人の如し。

旦に吳客を送りて夕に越人を迎ふるもの亦何ぞ多きや。嗚呼彼の銅臭紛々たる友は山の如し。獨り泥中の蓮無きを如奈。

(四)

方今世上人心の歸嚮するところを観るに「天下の大道」(孟子の言)は年と共に陵夷暮夜密かに權門を叩き勢利に走て他を顧みざるが如きは日常茶飯事のみ。俗臭紛々たる記事は日々山の如く三面を彩るを見て誰か慨世の憤りを洩さざらんや。

(五)

憶ひぞ起す、一昨の仲秋靈輜正に宮闕を發せんとするとき、從容として白刃に伏したる人ありしを。乃木大將は實に三十年の知遇を忝ふしたる明治聖帝の爲めに殉じたるなり。

大將の人格は玲瓏として玉の如く大將の武勳は赫々として天日と光を争ふ。當に聖代に沐浴して天壽を完ふするも尙ほ能く一世渴仰の燒點たりしなり。

然も大將の心は蕭條たり。華車玉樓は其の志にあらず。淡然榮華を捨て、死に就けり。義を視ること泰山より重く身を捨つること鴻毛よりも輕し。

純忠義烈上は日月を貫き下は鬼神を泣かしむ。大將の風を望めば禮夫も廉に儒夫も起つべし。嗚呼偉なる哉。唯々惜むらくは數々の言行、予が秃筆の及ぶどころにあらざるを。

(六)

世人は尙記憶に新ならん。當時世を擧げて其の英風を欽慕し其の壯烈を謳歌し國民の信仰正に高潮に達せる際に何事ぞ。さる大學の教授某博士は其一知半解の見を以て冷然大將を漫評し不謹慎にも街氣の業なりと放語せることを。世人の鋒鋒は一齊に彼れに集り其の淺見を責め其の腐學を詰り唾罵極詆彼れの肉を喰ひ彼の骨を挫かざれば止まざらんとせり。之れが爲めに一時彼は紳士の齒するに足らざるものとして擯斥せられたり。而も怪なり其の舊創未だ愈えざるに大將の精神は速くも世人の腦底を遠ざかりつゝあるにあらずや。

由來附熱隨炎は人情の常なりとは云へさりとは餘りに現金的ならずや。

(七)

上下の蒼生昌平に醉ふの際、意外とも意外、卒如として烽火は東歐の一角に揚れり。

多年全歐大陸を席捲して我物がホに振舞ひ專恣跳梁飽くを知らざりしウイレルム、カイゼルは今や列強の八面鋒を喰ひ窮鼠の勢必至となりて戦ひつゝあり。警鐘は亂打せらる。同盟國既に渦中に投ず。我れ又義のために鞘を拂て起てり。嗚呼大亂の前途は茫洋として測るべからず。

恰もよし今秋は大將の三周年に相當す。知らず地下の大將如奈の眼を開いて時局を見る。泣ける乎、將た笑める乎、幽門の裡鐵扉堅く鎖し消息杳として知るに由なしと雖も吾輩は一世の風潮を見て英靈に對し遺憾無き能はず。口にこそ唱ふれ三國干涉の際彼の「臥薪嘗膽」遺恨骨髓に徹するの氣分を忘れたるやの感あり。

然らざれば今少しく緊張すべきにあらずや。

希くは予の疑懼をして幸に杞憂に了らしめよ。

(八)

嗚呼舉國一致は優美なる國民友情の發露なり。

陛下の臣民に貴賤の別無し。齊しく忠良の赤子なり。國民相互の間の障壁を除かざれば國運の進展は得て求むべからず。司令官の精神も撃なれば、募僚兵卒の心も撃、宰相の精神も奮なれば山間草莽の心も奮、其間差の凝滯を許さず。

殿上の人、率土の濱、意氣相投じ肝膽相照すること唇齒輔車の如くならざれば眞の一致は望むべからざるなり。平時尙は然り。軍國に處しては層倍の努力を要す。

(九)

大詔一下矢は既に弦を離れたり。旌旗潮風にひらめく幾隻の艤艫舳舻相銜みて雄姿堂々渤海を壓し、極東の地亦漸く事多からんとす。

吾が國民たるもの豈に臥榻の下に鼯睡を事として當世の務を忽にするの機ならんや。君民上下、眞の一致を爲すべきときは來れるなり。

予は返へすくも友道提唱の徒爾に層せざりしを喜ぶ。

(十)

凡そ士の國事を濟す孤獨不可なきに似たれども莫逆の友と協膠相濟し不遇の境にありては共に菜根の味も甘しとし得意の境にありては相共に天下國家の大經綸を施す亦快ならずや。

之を維新の諸豪に見るに南州は甲東と竹馬の友なり。松菊又南州と意氣相投じ、江藤、桐野、大山、板垣の輩皆然り。こゝを以て彼の回天の偉業をも成すを得たりしなり。

嗚呼維新當時何ぞ夫れ燕趙の志士多きや。

之を思ひ彼れを想ひて今日の時局に想到せば

友道振興の要轉た緊切なるを覺ゆ。

君に告ぐ歡狎觀愛肩を打ち袂を執りて以て意氣相投せりと爲すの徒は僞友なり。懇切善導諄々の勁骨を有するものは眞友なり、而して我輩は切に友道を慫慂す。古語に謂へるあり、匹夫心血を盡がば丈夫も爲めに身を殺すを辭せずと。況んや多年互に知り知られて共に薪水の勞を執り共に學窓に通ひて書を講せし友に於てをや。而して方今世道人心正に爛額焦眉なるに當り友道を痛論す又故なきにあらざる也。語を寄す天下の不倫の友語を寄す社會の潰々者流、君見すや管鮑貧時の交を。

◎乃木大將を意外の所に持ち出して大將もさぞや迷惑がらるゝことならん、謹んで潜越の罪を謝す。

九月中旬細雨蕭々たる夕まだ落ちぬ梧葉を眺めて辻生再記。

青年活動の新領土

第五學年甲組

岩 増 文 雄

青年程成功といふことに心を苦めるものはあるまい。又其功名心あつてこそ活動の氣を生じ潑刺たる勇氣を起さしむることが出来るのである、中にも功名心の盛んなる人は往々戰國時代や維新時代の事を追想して、我若し斯の時代に生れ居たらんには必ず風雲に乗じて大飛躍を試みる事が出来たであらう、

實に惜しいことをしたなどと嘆息するけれども之は大いに心得違ひと言はなければならぬ。

何とならば成功は決して時代によるものではない、今日豊太閤や東照公の如く活劇は出来ないにしても昔の人には夢見ることも出来ない廣大なる舞臺が吾人の前に展開せられつゝあるのだ。秀吉や家康の成功は日本と云ふ一小舞臺に限られて居た、然るに現代の人は世界と云ふ一大舞臺に得る事が出来るのだ。

成功といふものは特に或時代に限られて居ると思ふものは實にケチ臭い考へである。

又成功と云ふものは大都會に於てのみ得らるゝ様に考へて居る青年が少くない、これも決して成功と云ふことを正當に了解して居るものではない、此證據には東京や大阪でなければ成功が得られぬと考へて居るから競つて大都會に職を求めんとして居るではないか。

斯の如きは全く現代青年の心に蟠つて居る一大迷信である、我輩は青年大多數の煩悶したり失望したりするのは此迷信あるが爲ではないかと思ふ。

しからは此迷信を破るには悟道と云ふことが必要である、佛教で言ふ所の悟は慥かに煩悶や苦痛を除去する力があるが吾人も亦此迷信を打破するに有力なる悟道を求めなければならぬ。

こゝに禪宗の悟を言ひあらはして居る詩がある。

盡日尋春不見春、芒鞋踏遍隴頭雲、飯來笑煞梅花嗅、春在枝頭已十分。

如何にも其通りである春を尋ねるに遠方の山や谷まで出かけて行くには及ばん、自分の庭にある梅花を嗅けば春は其處にある事を知り得るのである、若し吾人にして幾度か職業を變じ場所を更ふることあらんか、これ全く徒勞であるかも知れない、成功は吾人の足下に轉がつて居るのだ。別段大都會に行くの必要もなければ緊要なる位置に上るにも及ばない、成功は恰も空氣の如く如何なる所に於ても得らるゝことが出来る普通明なるものである。

余は青年の多數が今日も尙迷信の裡にさまよへるを悲むのである。功名場なるものは殆んど大都會に限られて居ると思ひ狭小なる範圍に於て成功を求めんとするのであるから勢ひ激烈なる競争にも遭はなければならぬ、黄塵萬丈の裡にも没頭せねばならぬのである。

今や諸君の功名場は大都會以外にまで擴張せらるゝ様になつた。山高く水清き天然の美に接しながら常に鬱勃たる功名心を満足せしむることが出来るのである。

今や第二の新學期を迎ふるに際し吾人は將來の爲に何等かの新計畫を立てんとして居るのである、若し吾人が沈思黙考して吾人の活動を新領土に傾注する事が出来たならば其は實に吾人のみの幸福ではない。

自分はこゝに現代青年の成功場に對する一大迷信を論し諸子の反省を請ふ次第である。

成業の要素

第三學年甲組 大鳥居武彦

題して成業の要素と言ふ成功は是れ人生最終の目的たるや今更吾人の暇々を要せざる所、然らば之れを達する方法や如何。

勤 勉

アヴィナントの詩に曰く

光陰は造化の賜へる財源なり之れを利用して終始怠らざるものは必ず富を致すべし。

天上の星も地上の砂も勤勉已むなくんば遂に集め盡し得らるべし。

人は働かん爲めに生れたり勞働は神聖也獨立因て生じ自主因て來る懶惰が人を奈落の底に陥るゝに反し人若し勤勉怠らずんは人生何事か成らざるを憂へんや。一寸の光陰と雖も空費せず堅忍刻苦勞を意とせずして業務に熱心なるは則ち成功に進む第一にして事業成就の基たり幸運の女神は常に勤勉なる人の上に臨むもの儉安は失敗の基也故に古語に曰く稼ぐに追ひ付く貧乏なし、と信哉。

忍 耐

ロングフェローの詩に曰く

高尚なる人に神聖なる熱心あり。

そは其胸に絶間なく

常に燃えつゝ息む期無し

唯だ勞働し忍耐して

其の目指す所を探りつゝ、

探りあてざるその中は

勉め勵みて息む期なし

此れ洵に偉大なる忍耐に依りて亞米利加大陸を發見したるコロムブスの心事を歌ひたるものなり苟くも不平を忍び艱難に耐へ得るものは如何なる事をも成し得ざらんや一度失敗に屈して其の志操を枉ぐる事あらんか乃ち失敗する毎に其目的を變ずるのみにて徒に失敗を繰り返し損失を重ねるに過ぎざるのみされば須く忍耐せよ厭く事勿れ失望するものは自ら信ずる事の薄き者也忍耐と自信とは相伴はざるべからず我れ自らを頼みて千挫萬撓困難に耐へ不平を忍びて勇往邁進するものあらば此れ則ち最後の勝利者也虎と見て岩に立つ矢もあり天は自ら助くるものを助くと言ふに非ずや。

正 直

ウガズウガルス歌ふて曰く

苔蒸す岩の陰に咲き

半ば人目にかゝらずも

その美しさ氣高しさ

明星輝きある如し

人若し正直だに守らばいかで世に知られざらん人に重んぜられざらんよしや虚名は歌はるゝ事なく其

美しく氣高きは實に百合の岩間に咲けるに異ならず正直は信用を産むの母なりとは千古不易の金言也約束を守り虚言を吐かず私曲を行はず不正を爲さざるに於ては世人の信用其の身に集り期せずして成功の域に達し得ん噫正直なる哉。

節 儉

大人豪傑の偉大にして高きも

初より高きにあらず

同朋知人の眠れる夜の間に

攀援して高きに至れるなり

我等は翼なければ飛ぶ能はず

されど攀援すべき足を持てり

歩一步層一層勉めて倦まざれば

何時かは我が志の雲外に達するを得ん

此れロングフェローが英雄偉人に到るの要道を歌ひたる詩也實に頂に登らんとする者は麓よりせざるべからず塵も積もれば山と成るを知らば須く勤勉貯蓄無用の冗費をはぶき厘毛の微と雖も苟くもすべからず然れ共吝嗇を節儉と誤解して當然費すべき費用をも吝しむは即ち所謂守錢奴にして固より論するに足らずと雖も能く自己の地位を顧み克己忍耐奢侈に流れず浪費を節するは洵に節儉の美德にして成功の必要條件也。

節儉ならざるものは奢侈遊惰に逸り剛健有爲の國民たる能はずして國家の富強之れより衰ふ奢侈誠むべく節儉守らざるべけんや史記に曰く

太山不讓土壤、故能成其大。河海不擇細流、故能就其深。

緻 密

英國の古歌に曰く

靴直し業としては比類なき靴直しとなり

鑄物師となりては拔群の鑄物を作るべし

凡そ事業を成すには完全なるを尊ぶ而して完全の功は緻密に非れば則ち得可からざる也精確なれ緻密なれ一事にても完全に爲したらんには千百の事を爲して悉く不完全なるに優るべし大功は細謹を顧みず等言へるは支那流の英雄人を欺くの放言にしてかのシーザー、ナポレオンと雖も亦極めて細心なりしに非ずや況んや英雄豪傑ならざる者に於てをや誤算は事業失敗の基因にして而して誤算は常に緻密精確ならざるより來るものなり急ては事を仕損するの言味はふべき哉。

機 敏

西人の歌ひたるあり

人世に潮流あり 満潮の時此れに乗すれば好運至り

潮流を誤れば人世の長航海 或は淺瀬に乗り上げ悲哀の淵に沈む

我等は好き潮流に乗せん さらずば立身の期到らざる也

運命は再來せず 請ふ其の笑顔を以て我に來り

義務の行路を示す時 直に此れを捉へしめよ

機を見るに敏なるは夫れ神乎才能ある者も機を見るに敏ならざれば則ち功を遂げ難し才能は正午に至る迄寢所にあり機智は六時に晨起すと善哉言や才能は學術的にして機智は實際的也機智以て機會を捕へ才能を使役す乃ち始めて功を奏すべし機會は常に吾人の眼前に横る去れど盲者は此れを見る能はず迂者は總ての機會を逸す況んや我より機會を迎へ又此れを作るに於てをや茫乎として憫たる者が我が才能を試むる機會なしと言ふは機會なきにはあらで機を見るの明なき也夫の瞶々者流は天下事あるの時に於て特に機を見るの明を失ふ此は小膽にして目眩すれば也順風に帆を揚ぐるが如く機會に乗じて才能を活用せば天下それ何事か成らざらん俚諺に曰く一年に起らざる事も瞬時に起る事ありと。

果 斷

ロングフェロー歌ふて曰く

人は運命の建築者也

彼等は時と稱する障壁の中に働く

或は偉大なる行爲もて

或は詩歌てふ裝飾もて

我等の建つる所により

時は材料をもて充たさるゝ也

我等の送る昨日今日

是れぞ我が建築の練瓦なれ

然り寔に人は運命の開拓者也運は天に在らずして人に在り斷じて行へは鬼神と雖も之れを避く躊躇狐疑逡巡は機會を失する所以也才能と機敏とは事を爲すに當り缺く可からざる要素なれ其未だ果斷なくして成功せし者あるを聞かざる也機を見て起ち臨機應變咄嗟の間に意を決して其の才能を活用す則ち此に於てか成功すべき也事に處して優柔不斷なるは男子の事に非る也況んや活潑の現社會に於てをや轉瞬指顧の間に英斷果決するの勇なき者は到底生存競争の活舞臺に乗り出して優劣を競ふ能はず一生を醉生夢死の間に過すのみシェークスピア曰く「猶豫の後には危険なる最後あり」と。(終り)

學生の務

第三學年乙組 寺 田 奎 太

不思議なるは世間の流行ならずや近時雜誌小説は大流行物中の一なり其間己が本務を放却して世の風潮

を追ふ者あり然して少しも恠まざるに至りては實に甚し、其中にて最も恠しきは學生が勤學の餘暇を以て文藝上政治上社會上の事項を討究することなり。

其千里笈を負ひて學校に集り父母が膏汗を流し爪に火を點して仕送る所の貴重なる學資を投じて勤むる所以は其の志望を遂げ或は政治家となり法律家となる工業家となり學者となり或は實業家となりて大正の新舞臺に活躍を試みんとせんが爲になり。

斯の如き望にして一意専心に其志望を遂ぐるには大に勉強せざる可らず他の不必要の事業をば顧みる遑はなき筈なるに却りて業務の餘暇を費すのみならで大切な時間をも犠牲となし以て其の務外なる政治若くは社會の風潮にまで其志を走らす者は餘の竊に以て最も恠しむしべしとするなり。

抑も此數年來吾國が頻りに國權の伸長に熱心なるも而も十分に志を達する能はざるは吾國の富強が彼に敵せざるにありと悟り數十萬の健兒の教育に心を用ひ居り殊更に未來國の中堅ともなるべき學生に望むこと大なりかゝる大なる責任を帶び而も大なる志望に向つて大いに邁進せんとする希望を有する諸士は寸暇も之を惜み一意専心ならざるべからず此の志の缺乏せる人間は其志望如何に美なりとも其成功は望むべからざるなり此の心缺乏せばニウトンも引力を發明する能はずワットも蒸氣を發明する能はざるべくワシントンも其功を見ずガルバルデーも亦志を達する能はざるべし一意専心の功豈大ならずや。

現今學校の數は大に殖え生徒も大いに殖えたり此等の青年をして悉く業を遂げ其望を充たせしめなば吾

國は忽ちにして政治家の巢窟となり學藝家の淵藪となり日々數多き需要に應じて猶餘ある筈なるに依然として高金を抛ち外國人を雇ふ所以は果して何故なるか、蓋し一意専心に其業務に従事せず其事にあたりて熱心ならざるの致す所なり。

夫れ雜誌小説の事業たるや社會をして知識の交換をなさしむる者にして固より必要なるものなり之に従事する事決して惡しきにあらず然れ共此事業は多少の時間を要する者にして多少本職に影響するを免れず以て本務の忙しき人は容易に之に對して力を致さざるなり。今や青年諸子の本分とする所は何ぞや學藝を攻習して他日大いに國家に貢獻するに非ずやかゝる雜誌小説の耽讀に費すが如き時は一刻もなし。諸子曰はん吾等は無用の遊技に代ふるのみ豈本分を怠るが如き事あらん何ぞ他人の杞憂を待たんと然り余は杞憂を爲す者なり然りと雖も事を成すは一意専心にあり此の心にして苟も缺乏せば終に成功は期す可らざるなり古語に曰すや「精神一到何事か成らざらん」と實に成功の母語たり此心を缺きて望を遠大に馳するは猶木に緣りて魚を求めんとするに似たり中道にして志を屈せんのみ入學者の割に卒業生の數少き中には病氣の爲退學するもの家事上の都合のため退學するものもあれどそは只少數のみ怠惰より遂に學業を怠り雜誌小説等の涉獵に日月を費し果は墮落の淵に沈み遂に校より出さるゝものも又頗る多し。諸子よ願くば雜誌(無益)小説の如き職分外なる不急の事に貴重なる時間を費すことなく意を一にし心を專にして學藝に勤勉し望を國家他日の富強に屬して其本務に向つて専心につとめられんことを。

あるものに生けよ

第三學年乙組 布 本 義 道

人は身體の爲めに使役せらるゝ、従僕たるのみ肉體の奴隸たるのみ、願ふ朝露を踏みて勞働するも夕月を戴いて尙汲々其業を勵むも、皆之れ食を得んが爲めのみ、衣を擇ばんが爲めのみ、偶々一食を缺くとも口腹の不足を告ぐるあり、衣又時ならざれば身體の健康を害ふ、美食を好み珍衣を愛し、奢侈にして飽く無き肉體の主人公に臣禮して、垢つもれば洗浴を進め浴所に案内して穢れし垢も自ら之を洗ひ、清潔なる衣に其の身體を温めしめ衛生に意を注ぎ、生理に考へ寝るにも感冒を慮り、起くるも傳染病を懼れ立てば勞を坐すれば足の痛みを、歩めば轉倒を止まれば血液の不循を、斯の如くに六時意を勞して身體に事へ、春に花秋に楓、さては月下に琴笛を鳴らし、燈下に艶麗なる容姿を供へて愈々勤め、滋々勵み、身體の御機嫌の程如何にと、切りに肉體の主人公に満足と與へん事を勉め、倦むことを知らざる我は、如何に身體に忠勤に肉體に誠實なるか。四肢五臓之を人間とし肉體之を主人公として崇め、而も萬物の長と云ふ。噫夫れ愚の極か、死せる人の寫眞を見て妻泣き子悲む。然れどもこれ唯一枚の紙たるに過ぎず、肉體は珍衣珍膳を擇ぶ寫眞のみ、活ける油繪のみ、焼けば將に灰と盡き、埋れば土と朽つるなり。身體は五體を備へたりと雖も、食せざれば手動かさず歩まず、眼耳鼻舌盡く其の活動を失ふものは、主人

と思ひし肉體の外更に尊嚴なる主人あるを知らざるべからず。されど求めんとして吾識るを得ず、これを人に問へども更に答へず、人又是を知らざるか。茲に至りて俄に身體の外、即ち肉體の多に最重んずべく最敬すべき、或るものを求めんとして精神的方面を取りて倫理に求め哲學に探れども得ず、されば世は唯精神教育或ひは公德養成を叫びて、一時白布の類を覆て香水を撒布するに異らざる概あり。然れどもこは日を久しくせず、社會に流す惡影響は底止する所を知らず、遂に法網を破り平和を損し秩序を亂る等粉々たる世の惡臭新聞の雜報面に充滿せむ、然れども、こは唯行爲上に顯るゝ臭氣のみ、若し思想上に深くより一層深きに探りて、表面の覆を取りて心と云ふ死體を發見するならむには、更に驚き、啞然として云ふ處なからしめむ、そは精神の死せるなり、日に腐敗する吾心、不德義、没人情、不忠、不義等蠢々乎として數を加ふるこれなり。

往昔より大和魂を稱して強國の名を恣にせし我日本は精神的に先づ亡びんとす、あはれ精神の城中は惡魔入り満ちて、忠恕、仁義、謙遜、正直等の良臣打死して、孝、梯、忠、信、仁慈、博愛、手を引きて遠く落ちのび、貪瞋、嫉妬、邪曲、傲慢、放逸等の惡將固守して強堅又落城せず、大和心と歌はれし昔の花は何時しか散り果てゝ、失せにける我心かな、あゝ憐むべし世の非運を。

昔日の日本は今日の日本に非ず、腹をさいて身を清ふせし義太夫は、今これ幾人かある、此の時にあたり唯一の凋れず、朽ちず、倒れず、愈々青く、滋々高く、最も強く愛の至極なる、爾かも瑞々然として萬木をぬきて泰然たる、而して又國家を擧げて托すべき心靈を傾けて、一切を委するに足る、あるものを我等が精神上に見出して、以て之に依らざるべからず。(完)

日陰の草木

第三學年乙組 青谷良三

日陰に生ひ立ちし草木を見るに、其花兎角美麗ならず、其果實亦十分に實る事能はざるのみならず、若し一度之を屋外日當り善き場所に移植せんか、忽にして凋落し、將た枯槁し去るの外なかるべし。然るに之に反して、初めより野原の如き雜草の間に生ずと雖太陽の光線を受け、空氣の流通其宜しきを得んか、假令時としては、烈日の焼くが如きあり、風霜の枯らすが如き、三伏嚴冬の候と雖も尙且能く之に堪へて、終には亭々天を摩する大木となり人をして仰ぎ望ましめるの偉觀を呈するに至らん。

蓋し人の世に處し、身を立つる亦能く之に類するあり、即ち吾人にして、若し身心共に健全なる發達進歩を遂げ、振天動地の大業を爲し、偉勳赫赫旭日の如く、廣く天下萬民をして之を仰望せしめんと欲せば須らく青年の時代よりして、常に人世の日當り善き場所、言を換ふれば、生存競争の街に投じ、能く艱難に堪へ、辛苦を忍び、以て身心鍊磨の工夫なかる可らず。然るに若し夫れ不幸にして幼年の時期より幾多の貴重なる歲月をば、遊惰安逸に浪費し、或は唯々平々凡々として人世の日陰たる家屋の隅にのみ送りて、毫も世上の日光を受けず、或は又世態人情の風波にも曝されざらんには其結果管に道德の花の美しからず、智能の實の充實し得ざるのみならず、若し一度世態保護なきの處に出でんか、或は自立自營せんとするか、恰も前述せし日陰の草木と同じく、亦忽然として挫折し、將た零落の深淵に陥るの外なかるべし。彼の俚諺に所謂可愛子には旅をさせよとは蓋し此意を表はしたるものならん。(了)

木々の梢も若みどりして

米原と長濱との間平坦砥の如き途の兩傍には農家のまばらなるに生垣の多くが皆新緑を粧へるを見

て
○音つるゝ人もなけなる賤か屋の

まかきを粧ふわかみどり哉

同じき邊りの農夫等多く田畑に出で、耕作し家々は大かた戸閉せるに梨の花の盛りなるが見えければ

○田わさする賤の家居はとさしつゝ

留守の人も梨のはな咲く

又或る家の門邊には白き蝶のどび居て誠にのごかなるをよみて

○人は皆のらに出けんしつか家の

とさせるかどに飛ふこてふ哉

長濱に近きあたり田にも畑にも菜の花の夥しく咲きたるを見て

○途のへは菜たねの花のときめきて

こかね分けゆく心地こそすれ

長濱公園に晝食して後ち湖岸を傳ひ右手にうらゝ



文

苑

長濱行の道草

特別會員 村田林次郎

大正の三年四月三十日本校職員生徒長濱方面へ遠足にとて出發し先づ彦根町を放れ初めて野らいで將に切通しの嶮にかゝらんとするに此のあたり薄公英すみれ蓮花草きんぼうげ等の花咲き又雲雀はゝじろなんどの鳥も頻りに鳴きければ

○なつ近き野らの通ひ路わけ行けは

花のいろゝ鳥のこゑゝ

切通しの峠を越え鳥居本と米原との間やまのすそを傳ひ行くに道の右手の山々の木々の梢は早や新緑の粧ひ誠にうるはしく見ゆるをよみて

○山のはに夏はきぬらし今は早や

かなる湖面を眺めつゝ歸る途中雲雀の鳴くを聞て

○行きなやむわれに何をか夕ひはり

つはさも見えす聲はしてけり

又一首の心に浮べるまゝに

○みちもせに千草やちくさ茂りつゝ

雲井のひはり床やしむらん

我も人も大に疲れ漸くにして磯山をこゆ此の所道
やゝ險なれども崖下水清く風またやはらかに山の
松も面白し爰に暫く休ひて

○はる風のちきり久しき音つれて

むかふるさまや磯山のまつ

斯くて松原を過ぎやがて一行は無事校庭に着きぬ
松原の千松館附近にてよめる

○春風のそよふく頃を松原の

まつのみどりの色を添ふらん

桃山御陵参拜途中

特別會員 大和田愚山

過瀬田川

百里江山寂失妍 浩天有淚雨如煙

併寄知己之學生

巍然功就對江城 遠屋晴嵐分外明

樂水樂山任他取 看雲看月從心迎

書窓結義無親粗 燈影論文有弟兄

氣爽室清應耐學 先鞭誰能博英名

青葉の蔭より

第五學年甲組 大鳥居彦司

又猛烈な權幕ですネ。君達は狂人かとは餘りひどい。返答せずば其分で置かぬとは益々險呑。けれども私は常からあまりこうゆう事を云ふのは好まないので。だつて私は片田舎の一中學生二十歳になるにも未だ二三年もある小供ですもの。

が出る怒鳴なられても引込つんでゐるのも男らしくなさそうなので御註文に應じて喋口らして頂きませうか。君のやうな云つては失禮かも知れませんが、實際君のやうに宗教なくとも此世は送られるから敢て宗教の必要はない等と云ふ人は、その殆んど總てが一切の心靈界の事に無頓着な人、物質以外に安住の地を知らない人、生理作用

七〇

龍車此處過幾度 滿室無聲渡瀬川

戲酬兼坂先生舊校舍嘆

天爵先生何爲乎 漢宮空廢月輪孤

少安八景依然在 爲報愚山守舊愚

夏夜泛舟

携琴與客泛洞庭 月上龍吟西村醉處詩龍吟之窟照蘆汀

未倒瓢兮君且醉 城中今將苦蚊刑

又

玉兔涉波涼似風 棹聲洗俗點塵空

片舟不識何邊去 疑溯銀河到月宮

又

驟雨新晴水色奢 蓬窓涼冷月痕賒

詩篇未就酒漸盡 柳外魚飛波作巴

偶成

衝天佐和拔群翬 直臨彥城靈氣攢

寄語桃源五千戶 等閑勿見此壯觀

又

當年誰能識斯機 是斷以身防國非

掃部山碑高幾丈 彥城空見晚鴉飛

題新築校舍

以外に精神作用がない等と考へる人達であらうと思ひます。然しまあこんな事はさて置いて御互に考へて見やうではありませんか。人世最終の問題を、人世の意義終に如何と。この問題は五千年來幾多の偉人哲人を悩まし苦しめたものでありました。マホメットはアラビヤの曠野シナイの幽處に通れて、星辰や銀河と共に之を冥搜したのでありました。

佛陀は雪山の麓恒河の流れに通れて幽愁と斷食とを以て之を冥搜したのでありました。

其他キリスト、ソクラテスと枚舉に遑あらずとも申されませう。

私達青二才勿論何にも分らない、分らない處ではないそんな事を考へる素養は全く藥にしたくもないんですもの。死ぬ迄かゝつたつて分らないでせう……多分……だから御互にこの事を眞面目に一生懸命に考へて見やうではありませんか。

此の頃古本を混せかへしてゐた時實業之日本の増刊の中から次の様な大隈伯の言葉を見出しました「我輩の見る所によれば宇宙に磅礴せる大精力あ

り、否宇宙其自身が即ち精力の實在である。人間は此宇宙實在の大精力、宗教的に論ずると神とでもいふ大なる力を分賦的繼續的に享けて生れるのである」

又曰く

「我輩は宇宙實在の大精力を信じ、又人間精力の不滅を信するが故に、我輩の精力は宇宙の精力と同化するものなるを信じてゐる。而して此の信仰は又我輩の精力を一層不滅ならしめる。」

何も伯が總理大臣だから此の言葉は眞理だとは申しませぬが、少し味ふべきであらうと考へます。

君よ此頃の様な晴れた日、遠く沖合まで泳ぎ出て仰向けになつて彼の青い蒼い遠い遠い空を、ちつと靜かに眺めてごらんさい。或は星辰爛々として天の川の白く流れてゐる靜夜天を仰いで靜かに沈黙思想して見給へ。私はいつも天地人世を支配し、且つ之を一貫する大法則の存在を思ふのです。これを進化の理法也と云ふ方もあるそうです。

如何にも母胎中に活動する胎兒の十ヶ月の徑路は、人間が原生動物より進化して來た徑路の全斷

面だと云ふ事が出來ます。従つて其間には進化の理法も勿論あり得るわけです。が只だ進化の理法以上のものが此處に在ることを知らねばなりません。進化の理法は理法そのものに力があるのでなくして、力そのもの、生命そのもの、胎兒そのものに力があることを知らねばなりません。又君、此の進化の理法そのものさへ不可思議ではありませんか。不可測でありませんか。私達は一莖の草一輪の花に於てさへ時々驚異の念に堪へないことがあります。吾等は終に宇宙人生の秘密と偉大とに驚くと共に、整然として一絲亂れざるの一大法則の前に首を垂れて滿腔の敬意を表せざるを得ないのです。此に於て私は思ひます……他人はさう云ふか知りませんが……宗教心と云ふものは天地の壯大に驚異する所に其の根源を置くのだと。幼稚だと笑ひ給ふな。然し智識の進歩と共に、天地の科學研究は企てられ、自然力は反つて人間のために使役せられ驅使せられるやうになつて宗教心は一頓挫して一種の哲學と化したやうに思ひます。けれども私達の智識は果してどれ程

の價值がございませう。今日の心理學とか生理學とかの研究は如何んな權威を以て立つて居りませうか。自然界に現はるゝ又現はれない微妙な又壯

大な啓示に、指さへ染めることが出來ないのは只今の智識ではないでせうか。人間の精神活動及生理活動に於て殆んど其根源を捕へることが出來ないのは實に只今の智識ではないでせうか。此の智識が萬能となる時代は何時かと云ふやうな事は想像さへも出來ないのです。だから私は只だ只だ驚かざるを得ないのです。只だ嘆美し讃嘆せざるを得ないのです。

嗚呼一切は終に深秘と不可測と不可思議とにて包まるゝものではないでせうか。そうして此の間に嚴然として聳えて居るのは、天地人生を流れる一大法則、力、生命、不可思議の存在のみではありませんまいか。

そして私達は此の法則、力、不可測の潮流の中に存して居て又其一部ではありませんまいか。大隈伯の言のやうに。且つ私達の存在することは此の不可思議をば不可思議となさしめ、此の法則を法則

となし、此力をして力とならしめるものではありますまいか。私達は此に於て無限の感應を感ぜざるを得ないのです。

彼方に流れる水。此方に聳え立つ山陵。千里遠域の人。壁隣常住の友。皆私自身と何等かの交渉はなないものでせうか。關係する所はない者でせうか。この關係は一路直ちに迫つて自然人生を支配する一大法則の懷に行くのではありませんか。さうして此處に於て私等は神を見やうとして居るのです。靈を見やうとして居るのです。縹渺として闔開たる無限の靈界の新風光を此に見、物質に往して而も猶物質を超越する道を此に得やうとするこれ私の謂ふ宗教です。

ア、又私の僻が出て何も分らぬ事をするゝと引き延ばしてしまひました。實際こんな生意氣な事を口や筆では云つて居るけれども私の實際生活は實にお恥しいものです。どうか私なるものを離れて讀んで下さい批評して下さい。

もつとごん／＼と私を攻撃して下さい。喜んで御受け致します。